南蛮てまり

なんばんてまり

「菊」

南蛮てまりは、昔から天草地方の女の子の正月遊びとして親しまれてきました。しかし、明治の中頃からゴムまりなどの普及により、次第に制作する人が減少し、昭和30年代には一部の人でひっそりと作られる程度となり、消滅の危機にありました。そこで、消滅を危惧した本渡市婦人会が昭和39年、当時の副会長であった乗富ハルエさんを中心に、その伝統の技を蘇らせ、現代へと継承されました。

南蛮手まりは、綿を丸めて球をつくり木綿糸等で形を整えて「土台まり」を作り、「地割り作業」を行い、飾り糸（南蛮手まりはリリアンを使用）でかがり、最後に金糸・銀糸で仕上げるというのが基本的な制作工程です。現在は「土台まり」の芯を作るのに、丸い発砲スチロールに綿を巻き、綿が見えないくらいまで巻き糸で巻いて土台まりを作っていますが、昔は芯にヘチマや海綿・ぜんまい・木綿などを使い、それを真綿でくるんでいました。特に海岸部では、弾力性があり良く跳ねることから、海綿を芯に使用されていたようです。

近年、南蛮手まりは昔のように手にして遊ぶのではなく、世相に合わせて装飾用や贈り物として人気を博しています。令和４年度に熊本県伝統工芸品に指定されました。